

老舗の街・尾張町シリーズ10

商人文化と泉鏡花の文学

尾張町界隈の歴史と文学の散歩道



目 次

はじめに	1
日本海文化の流れと北陸道	2
文化の価値を知っていた前田利家	3
加賀藩の文化逸話と尾張町商人	4
明治維新直後の尾張町通り	5
鏡花と能楽	7
だんだら坂の赤戸室石の橋	8
里程元標回りの洋品店	9
主計町へ至る道	11
浅野川に架かる浪漫	13
あとがき	16

はじめに

「あの人(泉鏡花)が居ったということと、わたらの商売とは何の関わりもなかったようやね。今でこそ、何やら流行りものように騒いどるけど、あの頃は毎日の商いが忙しかったさかい、昼間は商売に関係の無い人のことを気にかけとる暇がなかったのが本当のどこやったね。

そりゃ勿論、夜ともなれば久保市神社の裏の通称“ひよどり越え”を通して、あの町へは旦那さんとして通うたこともありましたよ。」

商人町と文学者(泉鏡花)。かたや、日々の商いに於ける信用を増やそうとして頑張る尾張名古屋(荒子)にルーツを持つ商人達。かたや、腕の良い彫金師を父に、能楽師の娘を母に持ち、三味線の音色に囲まれて育った文学者。

お互いの関係は、特に影響しあうこともなく、何のつながりもないように見えながら、やはり、しっかりとこの界限にそれぞれが根ざしていることだけは事実です。確かに肌あいの違いは、求めて交流をするには至らなかったようです。

尾張町商人達の主計町[かぞえまち]への関わりの有りようも、先の古老が語ったようなところがせいぜいでした。又、泉鏡花も積極的に商人町には関わらず、わずかに尾張町の時計店の娘さんと横安江町の針屋の娘さんに淡い気持ちを個人的に抱いていたと言われているにすぎません。

そうこうする内に、9歳で母を亡くした泉鏡花は17歳で金沢を後にして、東京の尾崎紅葉の門下生となり、文学者としての道を歩んで行くことになるのです。以降、公けに私達が知っている限りでは、泉鏡花は金沢の地を踏まないままに晩年を迎えてしまう訳です。

けれど、泉鏡花の遺した個性的な作品を読んで行くと、この尾張町界限のことが、決して少なくない程度に、書かれていることに気付かせられます。自らの出生の地に対する愛着が、自然に文章の中に滲み出しているとでもいえまじょうか。

私達は、そうした泉鏡花の気持ちと、商人町の姿を文学の目を通して感じ取る為に、少し尾張町界限の歴史と泉鏡花の作品を散歩してみたいと思います。

日本海文化の流れと北陸道

日本の文化は、古く中国・朝鮮より伝わっておりました。それも、陸路よりも船の方が多くの荷を運べたために、海上からの流入が特に多くなり勝ちだったようです。

主な海上交通路の基点をたどると、耶馬台国があったと想定される九州と、神話で有名な出雲と、私達の“能登”になるのです。能登は、中世以前には東北の蝦夷を退治するのに通った中継点として栄え、“クヌカノミチ”（「ヌカ」は国處の意）と呼ばれる北陸道がありました。

平安京の頃には、渤海（[ぼっかい]＝百済の後継国）の使節をもてなすために能登・福浦に客院が置かれたという記録もあり、やはり海上の方が交流に便利だったことが知られます。ちなみに、能登から加賀にかけて美人が多いのも、この人種の交流が一役買っているのかもしれませんが。勿論、水（ひいては酒）と山海の新鮮な食物に恵まれていたこともあります。

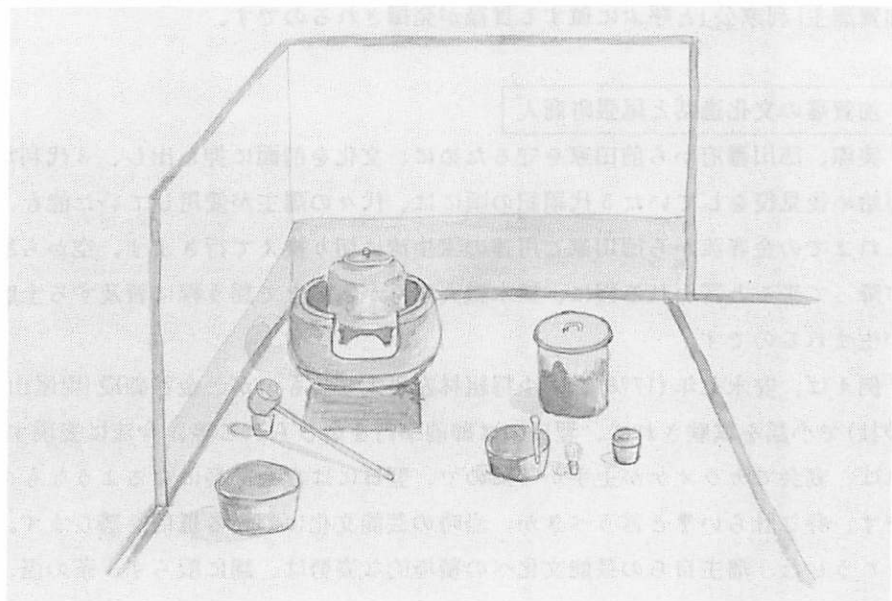
源義経で有名な安宅の関の富樫氏が勢力を振った頃の北陸道は、今の野々市の付近を交差路として賑やかさを持っていました。しかし、一方、正和元年（1312）に見られる「山崎凹市〔くぼいち〕紺一」という市場は、どうも小立野台地が張り出し、浅野川と交わる久保市（〔くぼいち〕＝今の尾張町界限）付近ではないかといわれています。ここでも海上の延長である浅野川の水路が、経済的繁栄から文化的なものの芽生えを持ち出していました。

この地は、やがて一向一揆の拠点となり、前田家の百万石の居城となって行きます。又、藩政時代に於いて、この界限の地の利を活かして日本海への大きなロマンを抱いた商人として、銭屋五兵衛・木屋藤衛門等が出たことはご承知の通りです。その後、陸軍第七連隊となり、金沢大学となり、今また新しい様相と文化を求めています。尾張町商人が栄え、泉鏡花が青年時代までを過ごしたのも、この地とともにあったからでしょう。

文化の価値を知っていた前田利家

加賀藩祖の前田利家は、戦国武士としての徹底した合理性と必要に応じた非情性の下に、その頭角を現して行ったことはご承知の通りです。それは、織田信長の親衛隊である赤母衣衆[あかほろしゅう]を出発点にして、豊臣秀吉、徳川家康と出会う中から、後の加賀藩主としての力量を蓄積することにもなるのです。

中でも信長は、自らが徹底した武力を使っただけのし上がった故に、武力の限界を察していたようなのです。彼の行動は、早くから岐阜の地で諸国の商人・職人たちを呼び集めたり、自由に出入りさせることで楽市楽座を設けたりしています。又、いままでの風習にとらわれることなく、外国から宣教師をも呼び寄せ、世界の情勢にも通じようとしてもおりました。茶の湯を積極的に取り入れたのも信長からなのです。



これまでの既製概念に囚われない信長にとって、日本の土地を背景にした武力の後に来るのは“文化”しかない、と見通して安土桃山文化を基いたと考え

られます。信長の形だけを真似て、金箔の茶室や朝鮮出兵をして新しい土地を求めた秀吉や、又江戸時代を通じて大名取り潰しをして土地をやり繰りした徳川家と違い、利家は信長の“文化”に対する先見性の真髓と利用価値を感じていたのです。

それが、たまたま信長より賜った所口(七尾)小丸山の地にあった、京風の畠山文化と触れ合ったことによって、大きな文化への目覚めとなったと思われま

す。だから、一向一揆の高ふりが色濃く残っている加賀の地を治める折に、今まで培って来た経済政策と共に、人心の安定に広く“文化”を取り入れて行くことで、加賀藩の安定的支配の礎と出来たのです。同時に徳川家に対しての平和外交の手段としても利用されたのです。

ここに、生まれ故郷の尾張荒子(名古屋市中川区荒子)での「利家さん」から、加賀藩主「利家公」と呼ぶに値する貫禄が発揮されるのです。

加賀藩の文化逸話と尾張町商人

実際、徳川幕府から前田家を守るために、文化を前面に押し出し、3代利常が始め後見役をしていた5代綱紀の頃には、代々の藩主が愛用していた能も、これまでの金春流から徳川家ご用達の宝生流に切り換えて行きます。空から謡が降って来ると言われる程に、植木職人すらが木の上で謡う程に普及する土壤が生まれるのです。

例えば、安永七年(1778)、大小将組林左平太なるものが、金谷御殿(現尾山神社)で小謡を試験されて、翌日には御前奉行を命じられる等、今流に表現すれば、宴会でカラオケが上手かったので、翌日には宴会部長になるようなものです。粋な計らい♪と言うべきか、当時の芸能文化に対する風俗を感じます。

こうした、藩主自らの芸能文化への積極的な姿勢は、謡に限らず、茶の湯、加賀象依[そうがん]、金沢漆器、加賀友禅、九谷・大樋焼き等の育成と熟成につながって行くのです。加賀藩細工所を現在に再現させた卯辰山工芸工房も、こうした気風を受け継ぐものといえます。

いわば、趣味と実益(御家安泰と人心の安定掌握)故に、よほどの経済的制約がない限り、振興策は助長され続けて“金沢らしさ”を極めます。いわんや、尾張町を中心とする御用商人達が、これに追従しない訳がありません。ところが、実際、彼等商人は文化を消化することで、むしろ積極的に商業手段としても利用して行く訳です。

金沢商人の財産が、「お金」「土地」「道具」に3分割されていると言われますが、この“道具”に愛着を持つところに、これまでのことが言い現されています。「モノ」だけに執着せず、「こころ」の豊かさを忘れない気持が、金沢商人の気質であり、形のないものの価値を知っていたのでしょう。

明治維新直後の尾張町通り

経済では改作法を柱に、人心の安定等には文化を柱にして、加賀藩は最大の外様大名でありながら、江戸時代300年間を乗り切り、明治維新を迎えました。維新当時の金沢は、東京・大阪・京都に次ぐ日本第4位の人口を以て新しい時代の出発点に立った訳です。

明治元年には、神仏判然令が布告されて神仏が無理やり分離されたり、同4年には廃藩置県が施行されたり、同5年には県庁が美川に移転したものの翌年にはすぐ金沢に復帰したり、等々多少の混乱もありました。

しかし、明治6年には、旧城跡に名古屋鎮台分営所(歩兵第21番大隊)が置かれ、枯木橋たもとは、「石川県里程元標」が建てられることで、新しい時代の基盤が固まり出します。

泉鏡花(本名:鏡太郎)が下新町(現尾張町)で生まれたのは、この年になります。

明治8年に歩兵第七連隊が城内二ノ丸に置かれることで、いよいよ加賀藩御用商人たちは軍隊の特需商人として繁栄を極め続けた時代到来。とにかく頑張って尾張町に店を出せば、もっと大きな商売が出来る!と、「いつかはあの町へ」を掛け声にいっそう有力な商人が集まり、活気はひとしおだったと聞きます。

鏡花の生まれた下新町も、この尾張町の1本裏通りで、橋場町交差点(「懸作り」[かけづくり]と呼ばれ、店頭の商品を並べてウインドーショッピングが出来た尾張町と並ぶ繁華街)の賑わいと、主計町の芸者町の華やかさに挟まれていたのです。

㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄

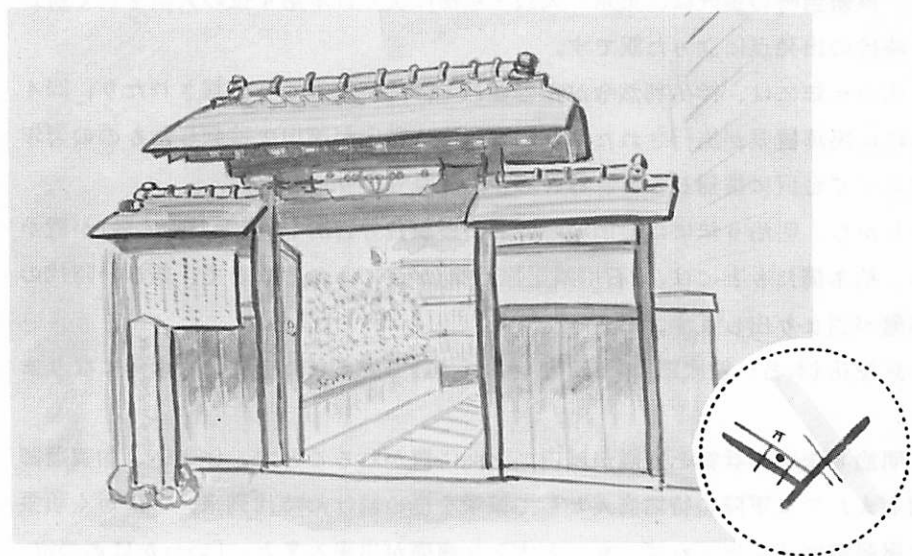
【照葉狂言】 泉鏡花より ⇔ 《新町～橋場町・尾張町》

我が居たる町は、一筋細長く東より西に爪先上りの小路なり。

両側に見好げなる仕舞家のみぞ並びける。市中の中央の極めて好き土地なりしかど、此町は一端のみ大通りに連りて、一方の口は行留りとなりたれば、往来少なかりき。

朝より夕に至るまで、腕車、地車など一輛も過ぎるはあらず。美しき妾、富みたる寡婦、おとなしき女の童など、夢おだやかに日を送りぬ。

㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄



下新町から橋場町へ出る間に、新橋という小さな橋があります。明治20年に出来るまで、この付近は行き止まりになっており、鍵状になっていたこと

から、鍵町とも呼ばれていました。やがて、新橋が架かるようになってからは、橋場町へ抜けられるようになり、人々に重宝がられるのです。

鏡花と能楽

金沢の能楽が藩主主導であり、藩祖利家は金春流の竹田権兵衛を呼んで重用し、2代利長は大野湊神社の神事能を始め、3代利常は観音院の神事能を始めるといった具合でした。そして、徳川綱吉と特に親交が深かった5代綱紀の頃には、幕府を配慮して宝生流に一本化されて行きます。

徳川の頃に能楽と呼ばれるまで、一般には猿楽の名で通り、観世・宝生流を上掛け、金春・金剛・後に加わった喜多流を下掛けと呼んでいました。尤も、いずれの流派も口伝が主体だったので、いち早く「風姿花伝」を著した観世流を手本にする流派が多かったようです。宝生流も、初めの頃は、観世流の本に独自の振り節(一種の音符)の記号を付けて教えた等と聞く程です。

ただ、観世流は連吟(数人で謡う)の調子が良いのに比べ、宝生流は独吟(独りで謡う)の調子が良いのが、大きな違いと言えます。いわば、集団の統率力か、味のある個人か、どちらも魅力的な訳です。

鏡花の母の鈴は、加賀藩御抱能役者の太鼓方の娘であり、兄は江戸の宝生宗家の片腕といわれる程の器量でした。「歌行燈」に書かれてある恩地源三郎のモデルは、この母の兄らしいとのこと。

新町は尾張町の商人に出入りする職人が多く住まいしていましたが、中でも大手門の正面突当りは、お殿様の真ん前だから恐れ多くて、常設の建物を建てられず、時折ムシロや蚊帳を張る程度でした。明治になってから、やっとこうした配慮もなくなり、寄席等も開かれるようになったのです。時代が下ると、金沢警察署の分署が出来、現在の民間病院が建ったりして行きます。

当時は、能の「中の舞」(中庸の早さと趣きで奏する優雅な舞)に三味線を入れる等する新しい芸能が流行し出しており、鏡花は早速これをモデルにして作品をこしらえたりするのです。

㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

【照葉狂言】 泉鏡花より ⇨ 《新町・高田医院》

見世物小屋の間まで、わが家より半町ばかり隔りし。真中に古井戸一ツありて、雑草の生ひ茂りたる旧空地なりしに、其の小屋出来たるは、もの心覚えし後なり。 (中略)

旧の彼の酒屋の土蔵の隣なりし見世物小屋は、あとも留めずなりて、東警察とか云ふもの出来たり

㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

だんだら坂の赤戸室石の橋

浅野川大橋から橋場町交差点を右に折れ、だんだら坂を上るように惣構堀に架かっている赤戸室石の橋の欄干があります。「枯木橋」と彫られており、一向一揆衆と織田信長勢との戦いの激しさを物語っているのです。あまりの戦乱の凄まじさで、付近一帯ことごとく枯れ木となり、年月を経てもそのまま赤く枯れたままだったので、橋の名前にまでなったといわれるものです。

㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

【胡 桃】 泉鏡花より ⇨ 《尾張町通り》

雪国の耕葉の頃である。大通りに道普請に敷いた、一面の小砂利に、人のつけた路も、積った雪を踏分ける一條路も、おのづから同じ形だと思ひつつ、故郷の町を歩行いて居た。

小ぎれいな菓子屋がある。

㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

鏡花の生家跡は、現在老舗の和菓子店の一角にあります。この店は、織田信長の手勢が一向一揆衆を壊滅せんとして攻撃した折り、亀田家の一族として戦った後、森下町(現在の金沢市森本町付近)に住まいし、商人としての経済力を持って尾張町に出て来て、すでに十八代を数えています。

㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

【道陸神の戯】 泉鏡花より ⇨ 《尾張町・森八》

.....権九郎先生は同時に冷汗を禁じ得ない気障を遣った。おなじく近所だが、當國第一と人も許した老舗の菓子屋で、紅白、精製のぎょうひ饅頭は、其の店の金看板である。従って値も貴い。....平民なぞは近づき難い権式なものである。

雪の夜なりし、母親の一周忌に、生前すきだった、其の生菓子や、佛壇にと、飴賣のもどりがぎょうひ饅頭。

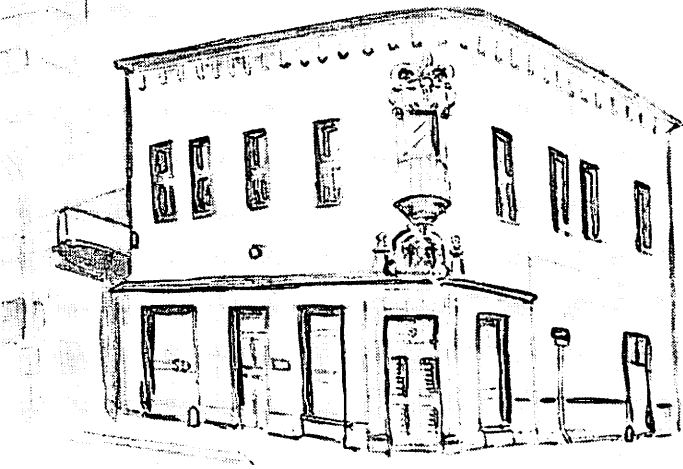
㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄

そしてこの店の商標「龍玉」は、始祖亀田大隅が使用した胴丸の紋章に起源を求めるもので、歴史の響きが、味わいとなって伝わって来るようです。

里程元標回りの洋品店

「石川県里程元標・加賀国金沢尾張町」と書かれた石柱がガス燈と共に建つ。明治6年の太政官達で建てられた折は木柱で、さらに「名古屋鎮臺」と書かれた小さな木柱も並んでいました。

横には河合商店や三田洋物店等の金沢ご三家ハイカラ洋品店の2軒が並んでいたのです。



㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄

【一之巻】 泉鏡花より ⇨ 《尾張町・三田商店》

予はいそいそして出で行きぬ。

学校より一ツ此方なる辻の角に、唐物店とむかひあひて、間口こそは劣りたれ、奥行深き、時計屋の、行冊に見る店ながら、取分け其日はもの珍しく、また懐かしく、たふとく覚えて、直ぐには店に入りかねたり。 (中略)

がばり、がばり、がばり、がばり、白山氷がばりがばりの、聲にまじりてなまぬるく、帽子焼ちや、帽子焼ちや、お腹の薬の帽子焼ちや、子供衆買ひな、呼びかはす、白山氷や、帽子焼や、夜商人の口々に、往きかふ納涼の客を呼ぶ。

㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄

旧東京帝国劇場を真似たといわれる赤レンガの三田ビルは、2階のテラスひとつを取ってみても、明治のシャレっ気を伝えてくれるようです。歩いてみると、玄関横に高さ30cm位の石柱が、先の方を円くとんがらせて建っているのに気がきます。

昔、雪道をゲタで歩くと、齒の間に雪がたまるので、この石の上で雪をハタキ落とすために使われたとか。時代の風俗絵が浮かんで来ようです。

㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄

【二之巻】 泉鏡花より ⇨ 《尾張町・三田商店》

左よ、右よ、此度はまた左よ、歩行の順、正しく胸に覚えつゝ、両側の家の墨絵に似たる、町中を辿り辿りて、やがて深水の店近き、少しく此方に歩をやすめぬ。

(中略)

急ぎ再び歩を移して、さきにもいへり深水のむかひの唐物店の前へ着く。

時に一天墨を流して、いつのほどにか、我が姿の見分かざるまで闇となりぬ。ト見れば背後なる瓦斯燈の、近くは一尺、末廣がり十間ばかり、彼方にては町の幅一杯に、遠くなるほど莖りて、軒を越し、屋根に這ひ、遙か彼方の通はづれの、酒屋の蔭を蔽うたる.....

㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄ ㊄

主計町 [かぞえまち]へ至る道

尾張町の家屋が漸しく増した後、新たにこの町を設けたのが新町の由来とか。いわば分家の町であり、尾張町ほど格式ばらず、当時の職人・芸術家・粋人が軒を並べる独特な風情を持った町並でした。

鏡花の生家の前にあった久保市乙剣宮神社は、「山崎凹市 [くぼいち] 紺一」という金沢最古の市場の由来にも関係するのではないかとされる程の地です。広い社の敷地は、当時の子供達の遊び場としては格好の処だったことでしょう。

神社の境内を通り抜けて、裏の階段を降りて行くと、主計町の廓が見えて来ます。粋人の間では、この階段付近を通称“ひよどり越え”と呼び、夕方にここを通ると、その日は帰らない(帰れない?)とされていたのです。

㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

【照葉狂言】 泉鏡花より ⇨⇩ 《久保市神社》

あそびなかまの暮ごとに集ひしは、筋むかひなる縣社乙剣の宮の境内なる御影石の鳥居のなかなり。いと広くて地をば奇麗に掃いたり。

栴五六本、秋は木犀の薫みてり。百日紅あり、花桐あり、また常磐木あり。

㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦ ㊦

富田主計の屋敷があったために主計町といわれたこの町は、明治2年から遊郭となったのです。鏡花は出生の一步下がったこの町を己の一部とし、三味線の音を聞きながら育つのです。金沢の花柳界では、一番こじんまりしていた反面、芸には磨きがかかっており、別名「流れ」とも呼ばれていました。

夜、この界限を歩くと、時折聞こえる「ドンドンツクツクドン、オ～ヤ、ドンドンツクツクドン……」の太鼓の音と、三味線の響きがほのかな色気を伝えて来ます。障子に写る影絵すら、金沢特有の曇った湿り気の中で、何か異なった世界を感じさせるのです。

そこに混ざる男の低い笑い声。あれは、昼間に活動していた商人の声か ____。

【三之巻】 泉鏡花より ⇨ 《主計町町並》

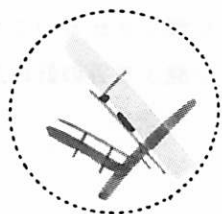
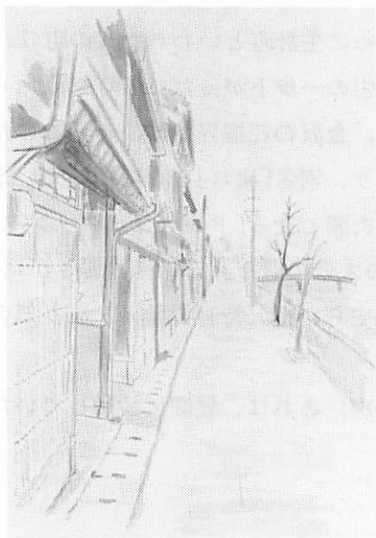
水底の土の色なるべし。水の流れ黒ければ名としたり。岸にのぞみたる石垣の高さ四五間もあらむ。其上に板塀あり。石垣と連りて、町の角を繞りて立てり。

いろいろの草石垣の間に生ひ、灌木は枝を交へたるに、小笹、熊笹茂れり。この淵の流れいと緩やかなれば、夜は静かなれども、水の音せず。

土手、石垣の間、路はいと細うして、衣の袖の茨の棘にかゝらざるやう、人一人肩をすばむれば通るを得べし。横ざまに延びたる楊柳の葉は、頭に支ふるばかりなり。

川上三町ばかりの間は、市街の中央を横ぎりて遊里の岸を流るゝより、人音、物音遙に繁く、冴え切りたる婦人の聲の、聞えてはまた止みなどす。月は出でたれど空曇れり。

折からそよとも風もなきに、石垣の草の中より、落つるが如く蛸たちて、土手の上に光りしが、すらすらと行きて大川の半ばに消えたり。……



浅野川大橋と同小橋の中間な架かるため“中の橋”と呼ばれるこの橋は、昔通行人から渡り銭を取ったため一文橋とも言われたのです。

明治42年9月に新たに架設され、主計町と対岸の東馬場界限の人々には、重宝な橋として利用されています。

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

【卯辰新地】 泉鏡花より ⇨ 《主計町・中の橋界限》

此の下流の、三つ目の、小橋と云ふの上まで来て、流に枝垂れた柳越に、醫王山の雪を見ると、欄干に凭れながら、何とも言ひやうのない涙がひとりのに落ちたんです。

石垣の上に石垣を積んで、も一つ高い石の塀は、今の人の城でした。下はもの凄いい淵なんです。……

寂い處です。崩れた土塀と、まばら垣ばかり。誰にも逢はず、正午頃だのに人通も何にもない。家々の背戸も庭も李の花が盛でしてね、少し薄宵味のあるのが交って、まるで暖い雪なんです。道は、それより乾いて白い。

飴賣のもどりがぎうひ饅頭。

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

浅野川に架かる浪漫

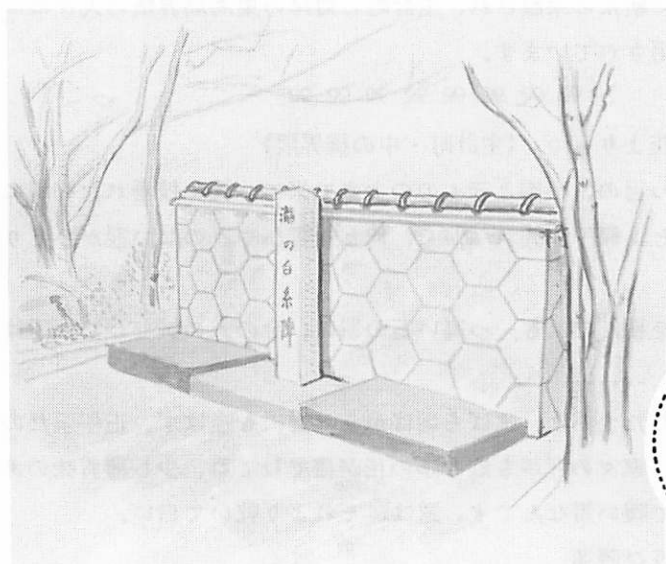
女川[おんながわ]とも呼ばれる浅野川に架かる“梅の橋”は、明治43年6月に付近の人達がお金を出し合って架けたものです。

浅野川大橋から一本上流で、並木町の料亭街と東の廓に架かるだけに、随分艶っぽい雰囲気もあったと聞きます。巷には、東の廓へ通うのに都合の良いように、わざわざある有力な旦那さんが、陰で相当お金を出したとか……。

人力車がやっと通れるかどうかの木造の橋の上で、酔い覚ましに欄干に持たれる粋人や、並木町の尾山座での芝居見物の芸者さんが通る姿は、一服の絵になるようです。橋の下の河原では、朝早く奇麗な水で友禅流しをする職人や、合羽屋や傘屋が油紙を干したり等、人と自然がゆったりと一体になるようです。

小説では、卯辰山の足元のこの界限で、女水芸師の瀧の白糸が恋人に再会す

るする訳です。梅の橋たもとには、石碑も建っており、歩いてこそ魅力が発見できるようです。



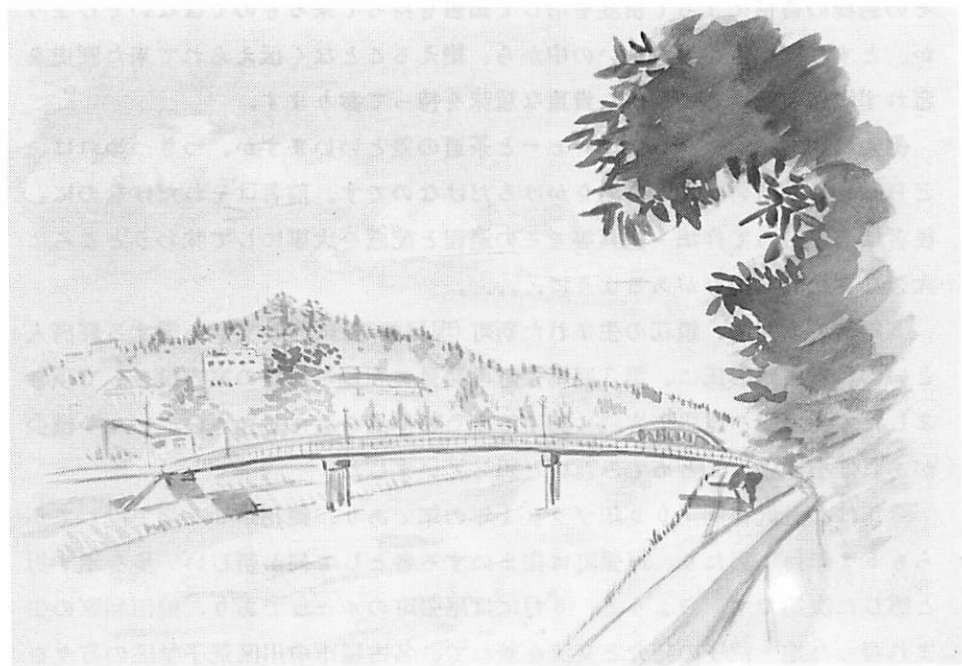
〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

【義血俠血】 泉鏡花より ⇨ 《並木町・瀧の白糸》

金澤なる浅野川の碓は、宵々毎に納涼の人出の為に熱了せられぬ。此節を機として、諸國より入込みたる野師等は、碓も狭しと見世物小屋を掛聯ねて、猿芝居、娘軽業、山雀の藝當、劍の刃渡、活人形、名所の覗機關、電気手品、盲人相撲、評判の大蛇、天狗の骸骨、手無娘、子供の玉乗等一々數ふるに違あらず。

就中大評判、大當は、瀧の白糸が水藝なり。太夫瀧の白糸は妙齡十八九の別品にて、其技藝は容色と相稱ひて、市中の人気山の如し。然れば他は皆晩景の開場なるに拘らず、是のみ獨り晝夜二回の興業ともに、其大入は永當たり。

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇



あとがき

“文化”は一つの成果ではなく、その成り立つ由来といいますか、いわばその過程の蓄積によって密度を増して価値を持って来るものではないでしょうか。とすれば、人の触れ合いの中から、絶えることなく伝えられて来た歴史を忘れずに保ち続けることが、貴重な意味を持って参ります。

例えば、インスタントコーヒーと茶道の差といいますか。つきつめれば、どちらも色の付いた粉にお湯をかけるだけなのです。前者はそれだけなのに、後者は心を持って作法・道具等でその過程と配慮を大事にして味わうところに大きな文化的な違いがあるように……。

3年前の5月に、鏡花の生まれた新町(現尾張町)に住む文学を愛する経済人といわれる清水忠氏に、第3回尾張町再発見おもしろ散歩の案内役をして頂きました。その際、尾張町界限に関する多くの作品を教えてもらい、いつか機会があれば小冊子にまとめてみたいと思っていました。

今年は、金沢市制100年プラス1年の年であり、鏡花が65歳で没してからも51年目に当たり、尾張町に住まいする者として何か新しい一歩を示す折と感じた次第です。ちょうど、6月には尾張町のルーツであり、前田利家の生まれ育った地・荒子の紹介と交流を兼ねて、名古屋市中川区荒子学区の方々を招いて“尾張荒子展”を尾張町の町民文化館で開催したばかりです。

歴史の積み重ねの姿を、商人文化の発展と共に、新町の生んだ泉鏡花の作品を見ながら紹介することをしてみたいと考えた次第です。何分、本業を持ちながらの取り組みであるため、至らない点も多くあることと思います。有識者の方からのご意見等を願えば、尚幸いです。

最後にこのシリーズが、皆様の温かい心で未長く続き、尾張町商店街が時代を超えて発展させて頂ければ、これに勝る喜びはありません。どうか宜しくお願ひ申し上げます。

【主な参考資料】「泉鏡花の各作品」(泉鏡花) / 「加能郷土辞彙」(日置謙)

「加賀藩史料」(前田育徳会) / 「稿本金沢市史」(金沢市) / 「風姿花伝」(世阿弥)

1990年7月発行

金沢市尾張町一丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

理事長 山田 勝二

尾張町若手会

会 長 村松 淳

さし絵 村上 隆

編集責任 石野 琇一